

「左上（陽）右下（陰）」について別記したことから、ここでは「前（陽）・後（陰）」と「裏（陰）・表（陽）」を取り上げる。

1. 「前後」

図－1ab 参照のこと。対の前後となれば鏡像である。鏡像の物理的説明は難解な処があるが、株式会社エイチ・エム・グループの HP の図柄などを参考に私の視点を加えて整理して見た。なぜ、鏡なのか、「かがみ」から我欲・我執の『が（我）』を省くと『かみ＝神』になるという俗説と関連するからである。我欲・我執の『我』抜きは、何も神様との交渉だけではなく、仏教は仏陀の訓えでもある。

鏡の物理的な仕組みを少し簡単に説明する。物としては、光の反射を利用する事によって姿・形を映して見る道具である。鏡像の仕組みはいつでも鏡に垂直な方向が反転するという事である。この自分自身と立てる鏡の位置関係で、鏡像は次のように前後・上下・左右が反転するのである。

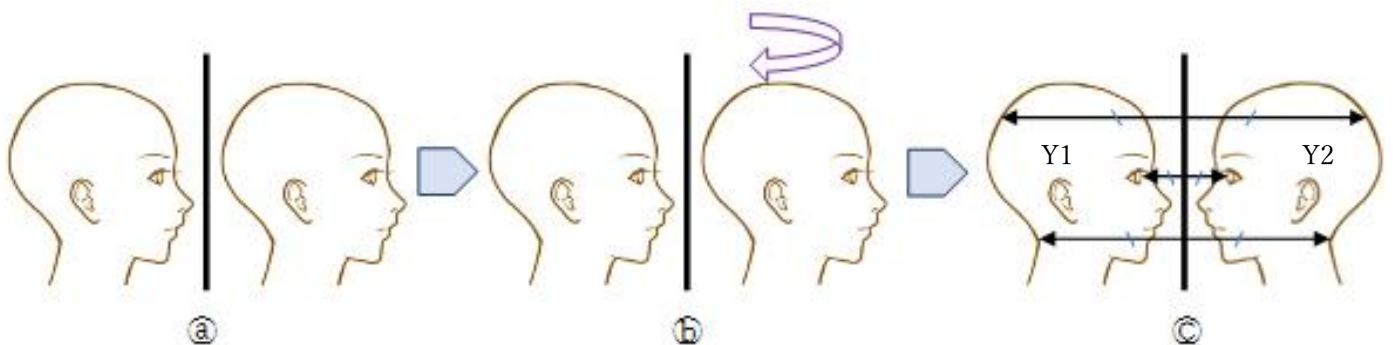
① 床（地面）に垂直に立てた鏡に向かって立った場合、私は鏡の方を見ているのに、鏡の中の私は私を見返して来る。つまり、視線の方向が全く反対でありよって前後が反転する。

② 次に、床に鏡を置いて、その上に乗れば、鏡の中の私は逆さになり上下が反転する。

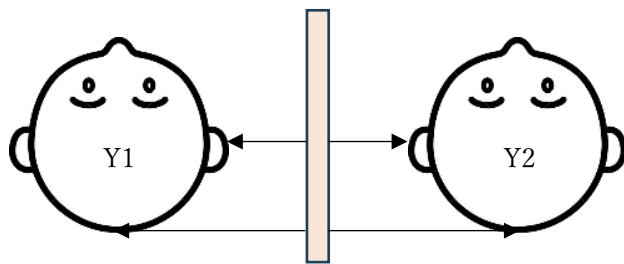
③ 次に、床に垂直に立てた鏡を私の横に置くと左右が反転する。

つまり、「鏡像反転像」は、前後・上下・左右 の三つの空間の軸を考えると、そのどれか一つが反転（逆転）し、残りの二つは、そのままなのである。あるいは、鏡に垂直な方向において、各点距離が対称になるという表現でもよいかと思う。どうしてそうなるのかは、光の直進性や反射性などの物理的な特性から起こることのことだが、難しい理論は学者が説いているからそちらに譲る。

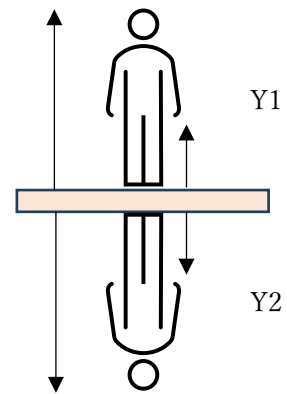
特に普通に鏡に向かうと左右が反転したように見えるがその理屈の一端である。①において鏡に向かった自分と同じ向きの自分を置く。次に②において鏡の中の自分を、床の水平面で 180 度右（左）回りに回転させる。そして、全ての部位が等距離の点を結んで像を成す（③）ということになる。すると、鏡に映った像は、鏡に向き合った物体が、反転しそのまま戻って来たと解釈出来る。ところがなぜ、左右が反対に見えるのか。自分は鏡に向かっていて、鏡の中の人物はこちらを向くが、この像を見たときに、人間は「もし自分が向こうからこちらを見るとしたら」という無意識のうちに想像力が働く。頭脳の中で自分を回転させて逆向きにするためになるのである。通常使用する鏡の像は、逆になっているのは、左右でも上下でもなく「前後」だけが反転しているというのが正解である。例えば、右手を上げたら鏡像は左手と見えるのは錯覚、あくまでも、鏡像も右手なのである。



図－1 a



図－ 1 c



図－ 1 b

次に右側に鏡を置いた場合は図－ 1 b の、そして、鏡に上がった場合は図－ 1 c のイメージとなる。

「鏡像は逆転する」とう表現は、何が、どこがとなるが、鏡を境界として、像の各点距離が対称性を持って離れるというのを逆転すると言えばそれはそれとして普通に使う場合は良いのかもしれない。

2. 「裏表と表裏」

その 1 ；出羽三山「八方七口」と言われた登拝口

江戸期には山麓に「八方七口」と言われた登拝口が存在していた。図(表)－ 2 は「西川町史 上巻」より転用して整理したものである。(括弧)内は、明治の神仏分離以前の寺院坊である。同じ真言宗の湯殿山別当 4 ケ寺の中にも「表」と「裏」を配当している。

-----	七口と旧社寺名		現在の社寺名
羽黒修験 (天台宗)	羽黒口（寂光寺）		（廃寺）
	肘折口（阿吽院）		（廃寺）
	岩根沢口（日月寺）		（廃寺） 岩根沢三山神社
湯殿山別当 4ヶ寺 (真言宗)	表口 表別当	七五三掛口 （注連寺）	注連寺
		大網口 （大日坊）	大日坊
	裏口 正別当	本道寺口 （本道寺）	（廃寺） 口之宮湯殿山神社
		大井沢口 （大日寺）	（廃寺） 大井沢湯殿山神社

図(表)－ 2

また、図－ 3 はその登拝口の地理的位置関係である。

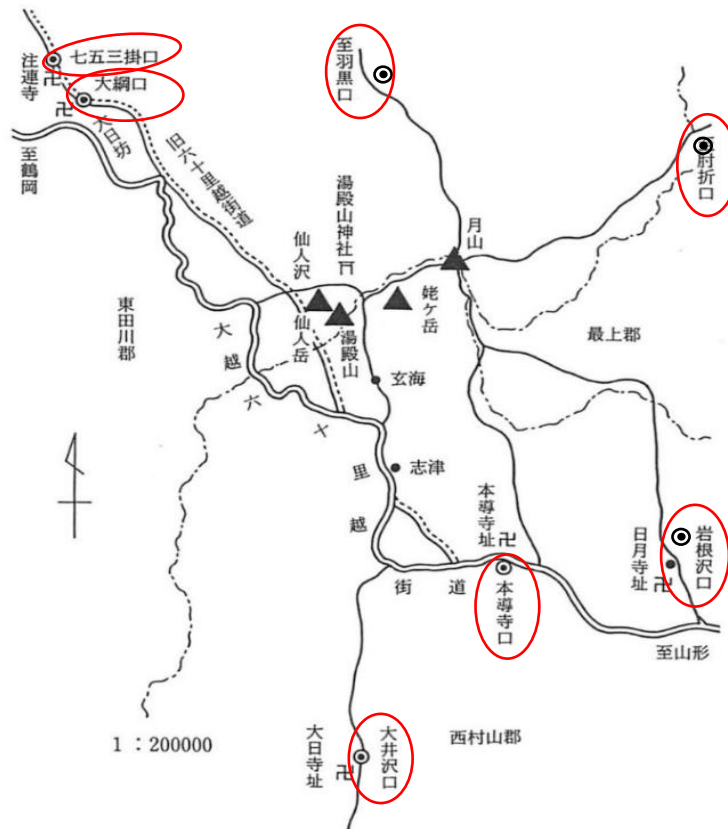


図-3

湯殿山八方七口の登拝口
(山形県総合学術調査会編集『出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)・葉山』)

その2；星野徳寶著「出羽三山参拝の葉」(昭和元年・三山参詣人案内所発行)の記載

「・・・羽黒口、(湯殿山口)を三山**表口**といい、・・・本道寺口と岩根沢口を**裏口**といい・・・」とある。

その3；「清川道」関係

井場英雄著「岩根沢ものがり」P30に興味深い次の記述がある。「・・・内陸から庄内に通ずる六十里越街道が、**表通り**であり、白岩から幸生に入り、間沢川、鶴部、沼の平、岩根沢、そして月山越が裏通りであったと見られる。・・・岩根沢門前先に捕り物道具の十手、刺又、捕り綱、袖がらみなどを備えた番所があったとか、また、烏川にもそうした備えがあったと聞き、何かしら裏街道の性格があり、烏川にも柵としての整備があったに違いない。」岩根沢から月山までは、高・清フレンドリー古道域のまさしく清川道である。この白岩からの道が裏街道と認識されていた時代があったということからは使用実態を想像して見た。

- ✓1 開山期間中に参詣者は諸々の入山料(賽銭や先達料)を免れるために裏街道を利用した。しかし、柵を設置したということでは賄賂で通れたのか。
- ✓2 開山期間中に、参詣者に加え、正式に入山料を徴取して鉱山関係者を通させたが、ただ信仰主体の参詣道においては裏街道と称したのか。
- ✓3 開山期間外(閉山中降雪前)に鉱山師(山師)や鉱夫が鉱山開発のための往来に利用させたことから、参詣という本来目的ではないので裏街道と称したのか。

ただ、岩根沢へは六十里越街道から分岐して行かれたであろうから、その先は裏街道に合流ということになるが、山先達同行の参詣者は難なく通行可であったろう。しかし、捕り物道具まで用意したということは、時には盗賊や乱暴狼藉者が侵入していたということなのだろうか。

そういうことは考え過ぎ、六十里越街道を表通りとし、それ以外の道は対比的に裏通りと称しただけという見方もある。

その4：「高清水通り」関係

旧本道寺山門のこと、図-4a 右手下に「裏門」と書かれている。他方で同図bは明治元(1868)年九月戊辰の役で焼失した後の旧本道寺境内を中心として描いた絵図（入手先不明となった）である、左記と同じ場所を指すであろう山門を「表門」と表記している。同じものを「表」と「裏」という正反対の説明となる。私はこの違いは以前から認知していた。

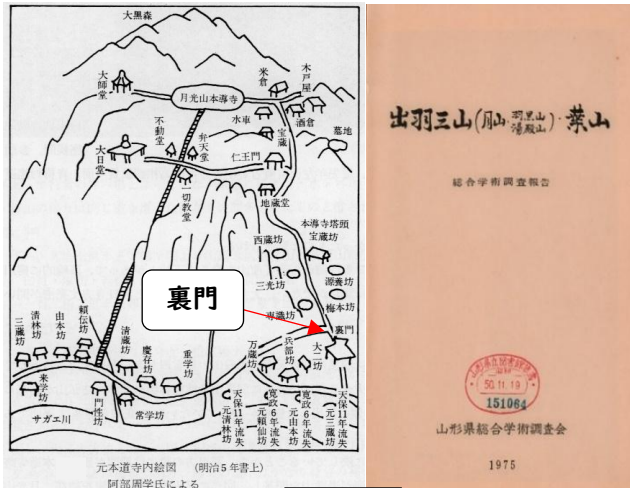


図-4a



図-4b



図-4c



図-4d

この門は、昔はいわば聖俗結界（境界）に設置していたものであり、西川町史編集資料第八号（四）113頁（四年六月文書）によると、元は同図dP1 辺りの場所にあったものを、大正初期にP2に移設し、今は同図c（鳥居先の門）の状況にて現在に至るものである。

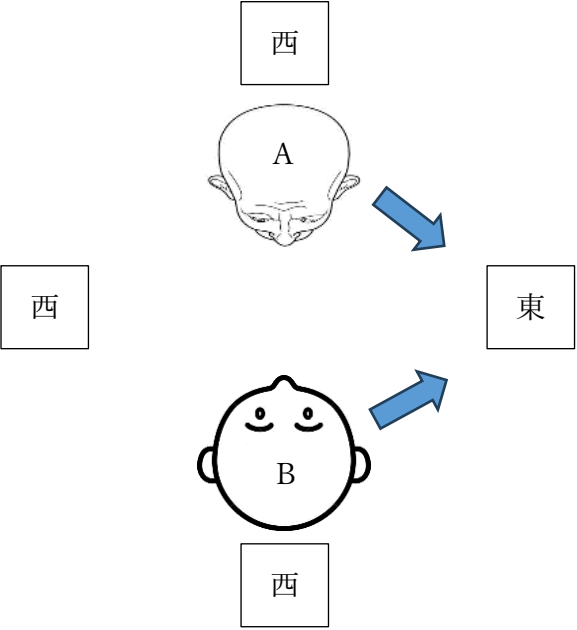
そこで、六十里越街道において山形側から境内（門前集落）に入る人からみれば表門であろうが、本道寺集落から見て東の方の端に近い所を見れば裏門となるかもしれない。どちらにしても間違いではないだろうが、真逆の位置付けになったのだ。世の中で伝言ゲームに似たよくある話である。現地現物を目前で共有せず、机上の議論ですれ違いから無意味な争いに至る状況が想起される。

3. 反転（反対）

「^{さじょううげ}左上右下」に対する反対のことである。

その1；雛飾りのお内裏様とお雛様の並べ方については、ご存じの方が多いと思われるが、上記の背景を踏まえたのが図－5aのと通りの京風の飾り方で、関東風（同図b）は男と女が反対になっている、その理由は、明治以降の西洋文化の影響とされている。キリスト教聖書を典拠とし「使徒信条で（もしくは『は』）東を向く」と云われているようで、祈る時は東を向くことになっており、東方角を聖視する延長線上にあるという。太陽の登る東の方角を、東洋、西洋問わずあらゆる民族が重要視して来たが、図－6のとおりに対比すると、東洋は統治者の天帝（天子、君子）視座で東を見た、すると主の左手が上位となる。西洋はキリストに向かう民衆視座で東を見た、すると主の右手が上位となる。その反映であると思う。共通する東を見ると時に、為政者目線なのか、民衆目線なのかという違いから来たのだろう。

	
「https://k-doll.co.jp/seck/hina/kantou-kansai/	「https://limia.jp/article/331464/」
(京風)	(関東風)
図－5a	図－5b

	
A；東洋の視座	B；西洋の視座
図－6a	図－6b

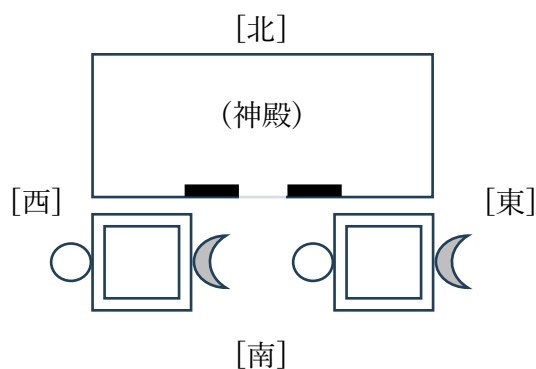
その2；日月の反転

図－7のとおりの山形市岩根沢石行寺境内の隣接地に村社「日吉神社」がある、神社は南面して立っている。同社正面に「村社 日吉神社」と刻された標柱兼石灯籠が南面してある。



図－7

分かり易く平面図化すると図－8のとおりの建物、石灯籠は地理的に真正に東西南北の向きに対応——のここにおいては、神社（祭神）本体から見て、「左上右下」、すなわち、^{さじょううげ}左側に日（太陽・日）、右側に（太陰・月）の配置ではなく、反対に彫刻されている。いわば、右上左下の配置としている。これは何を意味しているのだろうか。



図－8

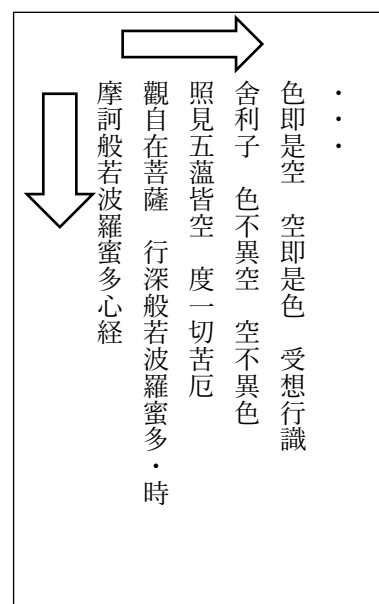
私の問題意識は、これは間違ったのか、あるいは古来の慣習であった^{さじょううげ}左上右下思想の認識がなかったのか、はたまた意図的なものである。前者のことを言われると面白くないだろうから、善意を以って後者の意図的な行為と推し量ることにする、正当化するための助け船を差し上げよう。

図－9aは、出羽三山神社が保存するもので、羽黒山中興の祖天宥別当が書いた「逆さ般若心経」である。同図では分かり難いが、分かり易く活字化表示すると同図bのとおりである。逆に書いた意図は、魔除け・悪魔祓いのためと言う説明であった。

つまり、この日吉神社における献燈は魔除け・悪魔祓いの意図を以って建立したということではないだろう。



図－9a



図－9b

表とか裏とか、前とか後とか、上とか下とかは相対的なもので、**視座、すなわち視点の軸の置き方、見方・判定する人間の立ち位置によって、真逆、反転してしまうことになる。**そういう相対関係は、陰陽二元思想が根底にある、陰と陽は対比的、両極的ではあるが、陰と陽の性質に優劣が生ずるものではない。陰陽二元は相対性・^{あいたい}相体制を特徴付けるための概念である。例えば、一方に表を当てれば、優劣付け難い他方に裏を当てたに過ぎないのである。「表」は明るい光、「裏」は暗い影という感覚的イメージ以って、とにかく、前者は善・優・真であり、後者は悪・劣・偽であると決め付けたがるが、それが対立の根源となる。人間、私とあなたが向き合った瞬間に陰陽二元のどちらかに自動対応し、相対関係が自動成立するのである、あくまでも相対である、したがって、上記のとおり優劣・強弱が生ずることは絶対^{N o n}にないのである、ところが、俺が絶対に正しいと我を張るものだから必ずや衝突が生じ対立することとなる。人間の認識は、すなわち、世の中に存在するあらゆる言説は相対的なのである、よって、同じ「もの・こと」に対する評価であっても立ち位置（基軸のセット）によっては真逆の価値が表出し、脱出不可能な対立に進展する恐ろしさを秘めるのが常である、森羅万象なのである。

基本・原則から外れると問題であるとか、以上のような記述に触れると違和感を覚えるとか言いたくなるが、その基本・原則という物差し（評価基準）がそもそも人それぞれ千差万別であるからは、「もの・こと」の善悪の客観的評価は判定しようがないというのが現実・世の中における真理である。法治国家、法令主義といえども同様である。

前出、宇宙創成に係る老子の有名な一説、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一（^{いつ}一）は二（陰陽）を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」とある。言語による説明上、時間軸の先後を与えているが、二の陰陽において陰と陽に本質的な優劣・軽重を与えていない、また、一、二、三、四、五・・・は森羅万象「もの・こと」に対する数理を当てたものだが、優劣はないのだ、例えば、五は単独で有り得ず一があつたればこそ五の意味が生ず。反対に、一は単独では有り得ず五があつたればこそ一の意味が生ず、これは少し分かり難いが、仮に一だけしか存在しない（一だけ存在する）としたならば、二、三、四、五・・・は生じないし、それ自体を一という概念を与えなくとも由しとなる、よって五があるから一の概念が生まれるという認識に立つ。

すると、陰・陽二元の根源的意味合いは、人間の知識（智慧）の^ゝ分化発展の基点を象徴する陰・陽であって、その二つに優劣の差異・序列はないという前提がある。その陰陽に配当する上と下、左と右、前と後、表と裏、日と月に、東西南北に本来は優劣の差異・序列を与えた訳ではなかったのだが、文明の^ゝ進歩、^ゝ分化発展、意味分節が進む中で、概念化に何かと便利なように優劣の差異・序列を与えて来たということであろうと思っている。

(end)